

研修報告書 No26

研修施設：佐川町立高北国保病院
四万十町立国保十和診療所
聖マリアンナ医科大学 長 渚

このたび、高知県での1か月の地域医療研修を無事終えることができた。普段は人口140万人の川崎市で病院研修をしているが、今回私が研修を行った佐川町は人口1万4千人と約1/100の規模の地域であり、自然にあふれるのどかな町での研修となった。患者さんの年齢層・疾患など2つの病院間ではかなりの違いがあり、川崎市という都市部だけの研修では到底得られない経験を数多くしたのでその内容をここに報告したい。

まず佐川町立高北病院について述べる。こちらは100床程の病床をもつ佐川町の医療の中核を担う病院であり、研修中は主に病棟業務、各検査室業務、外来見学などをさせていただいた。事前に予想していた通り、外来入院ともにやはり高齢者が圧倒的に多いことが印象に残った。80歳ではだいぶ高齢のイメージがあるが、こちらでは90歳、100歳の方々も多く、入院患者では60歳以下はほとんど入院しておらず日本の高齢化社会を改めて実感した。

また、大学病院での治療が落ち着き、急性期から慢性期に移行した方々の退院先としての慢性期病院がどのような治療を行っているのかを初めて見る事が出来た。急性期病院から引き続いての治療・リハビリだけでなく、今後についてご家族と話し合ったり自宅の受け入れ準備をしたりと、医師・看護師だけでなくその他のコメディカルスタッフの活躍も頻繁に目にした。ご家族との関わりで分かったことは、人口が少ない分医療者と地域の距離が近いということであり、一連の流れを把握しやすいことである。地域との密接な関わりが、都市圏以外の病院の強みであると感じた。

研修では病院だけでなく、デイケアセンターなどの見学、お年寄りの方々へのミニレクチャーのような発表も経験した。普段職場での触れ合いとは違った方向性で色々話したり、聞いたり、一緒に身体を動かしたりと文字でしか知らなかったデイケアの内容を体験した。佐川町ではお年寄りを地域全体でサポートする体制が整っており、特に百歳体操（高知市で考案された介護予防がコンセプトの体操）では病院外での介護予防策・地域の取り組みの充実を実感した。お年寄りの普段の生活における医療以外の重要性を認識することが出来たと思う。

また、私は診療所研修として十和診療所で3日間研修を行った。十和診療所には入院設備はないため、主に外来診療・往診を見学させていただいた。やはりこちらの地域でも高齢者が多く、特殊な疾患ではなく生活習慣病の長期のコントロールが主な診察内容だった。高北病院でも感じたことだが、診療所のある地域は山間部であり交通の便が悪い。また、多くの高齢患者は移動に時間がかかったり、移動手段がなかったりと診療所へ通院するのにも大変な労力がかかっていた。これを踏まえると、山間部の住人の方々を対象にした場合、やはり医療へのアクセスが地域医療の一つのキーポイントであると感じた。そのアクセスの悪さをカバーするために往診や出張診療所があり、移動の難しいの方々にとっては大変便利であった。

医療者側から距離を縮めることで患者側も健康に対して意識が高まり、両者が継続して関わっていくことが容易になるのではないだろうか。

今回高知県で研修を行い、月並みではあるが慢性期と急性期病院のすみ分けの必要性、必要とされる医療内容の違い、高齢化社会での医療の問題を見聞きする事が出来、非常に有意義な1ヶ月を過ごした。今後は全国での高齢化加速により患者が増加し、医療者側の人手不足も予見されるのではないだろうか。老老介護や一人暮らし、お年寄りの引きこもりなどは人口減少に伴ってますます増加していくと考える。それらの問題を改善する最前線として地域の病院があると感じた。医療、と考えると都市部や高度な医療技術などに意識が集中しがちだが、日本の本当の最先端として力を注ぐべき医療は地域医療にも存在すると思った。

最後に、高北病院の和田先生、浦口先生をはじめ諸先生方、病院スタッフの方々、十和診療所の先生方・スタッフの方々、高知医療再生機構の方々には大変お世話になり、深くお礼申し上げます。